

教育論

全

帝國大學講師學士會院會員原坦山先生題字
真宗本願寺派司教一等巡教使嶋地隱雷先生題字
尊皇奉佛大同幽幹事長大內青巒先生題詞
哲學館主文學士井上圓了先生演說
哲學館々友藤井順教筆記

琴峰堂藏版

神

神

神

神

五

四

五
四

德

音

酒

酒

大千世界好江山



宇宙渺茫是場
昆盧說法本來長
消成海盡成岳

即是天竺教育方

是井上文學士教育論

兩日老袖

墨

墨

題詞

圓了學士舌無骨。順教法師筆
有華。筆舌耦耕福田地。于教于
學辨蓬麻。々絲織成一卷錦。斐
然文章勝五車。謫々居士讀無
詞。唯稱南無阿彌陀。

青巒退

青嶽先生

晴。却。琳。南。無。阿。彌。如。
然。文。章。翻。正。車。齋。々。居士。難。無。
學。機。藝。圃。々。絲。繡。如。一。卷。餘。雙。
育。華。筆。舌。隸。隸。圃。田。賦。干。雉。干。
圓。丁。學。士。舌。無。骨。則。雉。去。唯。筆。
嚴。隨。

緒言

東京哲學館主文學士井上圓了先生演說筆記

明治二十五年二月十三日文學士井上先生を招
聘し法輪精舎に於て演說を開會し來聽者群を
爲し益を得ること尠なからす今その筆記を編
纂す聽記勿る誤謬なきを保しがたし讀者幸に
先生の顯彰する主義の大綱を領得し敢て其言
句に拘ること勿れ

編者識



教育論

哲學館主井上勤一先生遺稿
哲學館々友藤井順教筆記

余は、（以下省略）又都立館を其構内に設置し、（以下省略）同館の生徒五百余名を教育し、（以下省略）且、通信教育によりて、一千余名の校外生を教育するものであり、（以下省略）維新以來百餘年の歴史と共に、我教育法も一變し、爾來日を追ふて、（以下省略）隆勢に走りしを、未だ完全を得たりと云ふべからず、（以下省略）余其事につきまては、充分進んで欲する事柄少なからざれども、如何せん、限ある時間にして、（以下省略）詳かに説く事能はざるは余の遺憾に堪へざるなり、諸君も定めて五不満足ならんとは豫め御断り申して置かざると、（以下省略）凡そ教育の目的は、人を教へ人を育て、（以下省略）之をして完全なる人物となすにあれば、（以下省略）官吏

にも、宗教家にては、王業家、商業家、農業者にては、苟くも人間に生れたる以上は、教育を受けず行かねばなりません。然るに人間に生れたるが、教育の何たるを知らず、自分に子孫がありながら、之を教育せぬものがあり、若し世間に時給の重箱を所蔵するものあれば、之を大切に保存し、植木を愛するものあれば、朝夕之を培養する法を知るも、植木よりも重箱よりも、十倍も百倍も大切なる、子供を持ちながら、之を養育するよとを知らざるもの、果して人間の本分を盡したりと云ふべきが、養育費を教育するは、親たる者の義務中に於て最も重大なる事であり、凡そ教育に三種あり、一に家庭の教育、二に學校の教育、三に社會の教育であり、世間では、學校教育計りを教育と申せども、學校は六歳以上十歳以下を養育するものなれば、是れのみにて教育を完結するよとは、六ヶ敷ある

必ず學校教育の外に、家庭教育社會教育を待たねばなりません。家庭教育とは、家ありて、父母が其子供の上に與ふる教育法にして、社會教育は社會の朋友親戚が互に教育することであり、斯くして三種の教育が進めば、農業者工業家商業家等に人物が出來て、農工商の業が盛になる、喩へば一反の田地を持ち、十圓の金を持って、教育がなければ、之を増殖するよとが出來ぬ、夫れ故に誰れにても、教育を第一に施し行ねばなりません。世の中に親たるものか、子供の教育を怠たり、老て始めて後悔するもの随分多く、親の死するよとに悲泣の間に、此世と去るもの、澤山例のあることとてあります、之に反して子供の教育が行届けば、親が安心して死し、子供の出來が好ければ親の名も後世に顯はる、孝經には立身行道揚於名後世、以顯父母孝之終也、ともありて子供が立身する様に与るは、親たるもの、義務のみならず親の名譽

でありまど、且つ子供の教育に親の注意を要する点は、實、行を以て教育することな
 り、此種の教育法を感化教育と云ひまど、是れ家庭教育に於て必要なるのみならず、
 學校教育に於ても必要なり、古來大教育家たるものは、皆實行を以て教育したるもの
 てありまど、例へば孔子の如き、德行を目的とし、其一代一身上に示したる言行が、
 論語一巻中に傳りて、後世道德の模範となりたるにあらすや、又ソクラチース氏も實
 行を以て教育したる人なり、其妻ザンナツペと名け、性は狂妄にして温順ならざれど
 も、氏少しも之を意せそして、曰く、騎馬練熟せんと欲せば、最も標悍なる馬を撰ぶ
 へし、若し是をよれ善を馭するを得ば、何の馬か馭すべからざらん、今我衆と談論し
 て以て一生を送らんと欲するが故に、此女を娶りしなり、若此女の所爲に耐ふを得ば
 、如何なる人の所爲にも耐ふべきを知るなりと、又氏の教授とは、今日の人の如く、

學校杯に於て堂ると教授せしにはあらざ、朝早く起きて市街に出で、或は体操場に入
 り、或は工作場に入り、群衆の前に於て容易に談論應接して、教育を施せりと云ふま
 どであります

今教育の方法に三種あるまどを述べましたが、其教育の目的にも亦三種ありまど、体
 育智育德育なり、体育は身体を強壯にするを目的とし、智育は道理分別力を養生する
 こと、德育は子供の徳性を養育するであります、德育は教師の行によりて感化とするも
 のなれば、家庭にありても親たるものが、昔し話や古聖の善行なまど、口に説くより
 は、行に示して德育を施さねばなりません、又家庭にありて智育を施すにも成るべく
 書物によらざ、實物につひて教育する様に致さねばならぬ、己に學校にて、毎日澤山
 の課業書を學ぶ脳を凝らしれる上に、家に歸りて親は直に書物を讀めよと責むるは却

て腦を害して早く智識が進む代りには、早く愚かになる、五十才六十才になるとボンヤリしてつまらぬものになる、西洋では六十七八十才になりても、大丈夫なるものがあります、又天地自然によりて教育する法があります、例へば狭き土地に住めば、子供の心迄狭くなる、氣候溫和なる所に住めば、人智早く發達す、其代りには耐忍強力に乏しくなる、是れ教育家の注意して置かねばならぬとでありませ、要するに子供の教育は、他人や學校に任せるよりは、親が第一に之れを其身に引請けて、教育せねばならぬ、己に學校へ出と様になりても、猶ほ父母の監督が大事なり、其外教育上に於て注意を要する点は、學者を作るを目的とせしめて、人物を作るを目的とするものとあり、世間に學者少數にてもよろし、一町一村に一人か二人あれば足れり、工業家農業者商業家の如き、實業家は澤山入用のものなれば、教育は此の實業家たる人

物を養成するを以て目的とせなければなりませぬ、暫時休憩

學校教育のことは文部省の監督あれば、格別申述るに及ばず、家庭教育のまとは世間にて樂園とて、誰れも論せざるまとなれば、是れより一歩進めて御話致せん、家庭教育を施すには、村落の民家の様なる狭き小き家にては六才數ものにて、自然子供の心も狭小になり易し、又きたない内にあれば、決してよき考は起らざるものでありませ、依て完全なる人物を作るには適當の場所を撰ばねばならぬ、即ち廣く美き場所にありて教育をせねばならぬ、然るに人の資力限りあれば、誰も子供の教育の爲めに殊更に美大なる家屋を設くる譯には盡らぬものなれば、一村若くは一町の人民相合して設置せる寺院あり、是れ宗教上の信仰より建てたるものなれども、教育上にありては、家庭教育の一部分を勤くる教場でありませ、如何なれば教祖釋尊は、一代五十年間四方

八方を巡廻して布教せられしも、樹の下殿の影にて説教せられしものにて、決して今日
 の如き寺院を設けせしにあらざり、而して其後寺院の設置あるに至りしは、一は宗教
 上の安心を練習せる場所とし、一は家庭教育を實施する場所としたる故でありませ、
 是故に寺院は必ず一村一町中の最も風景のよき静閑なる場所にありて、地面も廣く堂
 宇も大きくして、家庭教育を實施するに最も適したるものでありませ、抑も家庭教育は
 父母両親と共に引請る筈なれども、母親常に家にありて子供の傍を離れず、又婦人の
 性質として深切慈特なるものなれば、子供を教育するに最も適したるものなり、然れ
 ども母親は婦人の身なれば、子供を教育する爲めに毎日山や川の風景のよき所へ遊
 びに行く譯に参らず、底で母親は子供を連れて、一村一町中の最も風景のよき静閑なる
 寺院に行き、家庭教育を實施する處になりたる處でありませ、毎朝夕寺院迄往

復すれば、自然に子供の体育を進め、又寺院にて種々の人に接すれば、自然に見聞を
 博し、智識の發達を助くるものなり、且つ寺院には偶像を安置せるものなれば之を
 禮拜する時は、子供の道徳心を發育するものでありませ、例へば阿彌陀如來の尊像は
 慈悲智慧圓滿せる徳を示したるものなり、觀音さまは慈悲の徳を現はして、其尊像
 に女人の相を示したるものなれば、我々か其像を拜すれば、自然に我か慈悲心を誘ひ
 起して道徳を練習する便を得る處でありませ、且つ寺院には宮殿莊嚴の美なるあり
 て、是れ亦道徳心を起し教育の手だてとなるへし、故に寺院は宗教上では安心立命の
 場所、教育上では道徳練習場と云ふてもよろしからん、本日は是にて教育談を終りま
 せ、一言余が巡廻の旨趣を報道致さん、其旨趣は昨年報告書中に載せられたれば斯に其文
 の一節を掲げておかせませう。

余は先年文科大學の速成を期し、并に東洋諸學講究の目的を以て、哲學館を組織し、茲に又日本大學の創立の準備として、専門科の開設に着手せり、抑も此専門科開設は、余が平素懷抱せる志望にして、殊に歐米漫遊中深く其必矣を感じ、國家獨立の基本を養成するは、獨り此一事にあるを信し、歸朝後速かに其趣意を世間に發表したるも、未だ同志の協賛を得るに至らざりき、然るに昨年十月我が 獻聖なる 天皇陛下辱く教育に關し下し賜へる、勅語を奉讀せるや、不肖猶は 天恩の優渥なるに感泣し、積年の素志を達するは此時にゐるを知り、十一月上旬を以て東京を發し、全國周遊の途に上り、寒天赤日を假して東西に奔走し、各地の有志者を勸誘して、資金の義捐を懇請せり(以下略之)本年二月五日馬關に着せしより、毎日各所に於て數回の演説を關し非常の盛會を見、本日は當地に來りて、亦此盛會に接せしは、實に感喜に堪へざる次第なり、何卒滿場の諸君奮て國の爲め道の爲めに、此舉を賛成あらんことを望みます、尙ほ學理上面白話あれども、如何せん之を述ぶる時を待と、遺傳なから之れにて止まじと。

教育論終

明治二十五年六月一日印刷
同 年六月二日出版

山口縣平民

發行者

藤井順教

山口縣長門國厚狹郡厚東村
第四百五十六番地

山口縣士族

印刷者

河內祐四郎

山口縣長門國厚狹郡厚南村
第八十三番地

印刷所

船木活版印刷所

山口縣長門國厚狹郡松本村
第七十番地

附錄

拜啓尊臺愈御清榮奉欣賀候陳は去る二月十三日井上文學士を招聘
演説開會致候際は御賛成被降有難奉感謝候就ては御禮旁(教
育論)呈上仕候間乍憚御笑讀被降度候時下國の爲め御自重專一に
存候草々頓首

但佛教大意、哲學總論、筆記致候ゆゑ未結に付削除仕候
發起者

明治廿五年五月

會主
藤井順教
石川富貫一
田中桂太一
古谷彌一
佐伯房太四郎
河內祐四郎

賛成員各位御中

名譽贊成員芳名

東京	島地晴雷殿	東京	小林秀知殿
東京	原坦山殿	美禰郡	森清藏殿
東京	大内青樹殿	山口	吉田右一殿
		大阪	佐伯勢一殿

贊成員芳名

小野田兼常壯太郎君	小野田掛部治助君	宇部	兼安直乘君	厚南	西村信太郎君
全	愛國會	厚東	西田政介君	全	金子禪鳳君
全	矢野清介君	厚南	小野直一君	藤山	上田潤平君
厚南	波多野謙三君	厚東	吉見勝乘君	美禰郡	刀禰勘三君
全	厚南小學校	厚南	伊藤順諦君	在東京	上田範之輔君
					岡崎木道君

厚南	岡原章潮君	在京都	若原觀巖君	須惠	和田春平君	美禰郡	三原清海君	
全	野村素介君	在布哇	姬路得雄君	藤山	笹井讓三君	藤山	日高建禮君	
厚東	藤井精三郎君	須惠	久野陽介君	全	松谷辰藏君	厚南	佐々木なみ君	
厚南	西田政雄君	全	古谷國二郎君	全	伊藤宗四郎君	全	山根伊三郎君	
	高千帆目	勇雄君	高千帆稻葉	教淑君	全	藤井眞壽雄君	松本	生田新一君
厚東	日高房二郎君	厚東	松岡春平君	全	櫻井一衛君	全	今橋猿馬君	
厚南	伊藤文助君	全	藤井幸八君	厚東	松岡文五郎君	厚東	末富縣輔君	
須惠	上田啓介君	全	田中恭介君	厚南	藤知小五郎君	全	村上九郎君	
全	江本龜太郎君	宇部	藤田權九郎君	厚南	田坂善作君	松本	松岡宰藏君	
全	渡邊達性君	全	藤田松兵衛君	全	平田周甫君	厚南	爲近善石工門君	
全	田中種吉君	厚東	末富精一君	全	大田程介君	厚東	山田伊之介君	
小野田	中川實助君	小野	末永武右工門君	全	江本禎介君	厚南	伊藤隆一君	

全	繩田禮介君吉田	永岡喜代熊君全	繩田精一郎君厚南	二木金十君
全	繩田庄五郎君厚東	三張秀介君全	木戸種藏君厚南	日高辨藏君
須惠	姫路國隆君全	田中清太郎君全	伊藤茂三郎君厚南	坂田信太郎君
厚東	原田義教君全	浴 峰吉君全	河内熊千代君厚東	原田直介君
全	小山法潤君厚西	長谷川岩太郎君厚東	河村祥七君全	天野清之丞君
万倉	木原龍吾君高千帆	南部龜次郎君万倉	池田治部太郎君全	野村民三郎君
美濃郡	安井定專君厚南	佐々木はるの君全	本原壽丸君全	松尾喜作君
厚南	高橋幸太郎君全	秋里虎之助君厚南	柴田尙辭君厚南	西谷政藏君
厚東	末富寬輔君全	爲近喜兵衛君全	若月勇四郎君厚東	上原喜曾君
全	宮本舜輔君全	白石一馬君全	眞鍋善作君全	上原彌三郎君
松木	池田退藏君全	西村新十君全	眞鍋良輔君全	末富万右工門君
高千帆	福永虎彦君全	繩田隆助君厚東	杉野龍藏君全	藤本三左工門君

全	田中喜兵衛君	在千葉縣	西谷啓之進君全	眞鍋傳次郎君全	白石政千代君
全	田中久千代君	厚南	河野素藏君字部	兼安純精君厚東	藤井光太郎君
全	田中新一君全	高橋樹之進君厚南	杉野辰藏君万倉	藤本綱之君	
全	田中耕作君全	伊藤恭介君全	佐野文助君全	武安次郎吉君	
全	尾山新九郎君全	松富與三君全	佐野卯之助君全	井上文三君	
全	尾山七右工門君全	伊藤十郎君厚東	田中清十君厚南	白石力藏君	
全	山根滿藏君全	吉富健策君厚東	高橋彌二郎君全	白石隼藏君	
厚南	繩田善介君全	田中作一君松木	黒瀬順藏君全	盛重吉二郎君	
在京都	河内幸太郎君全	江本謙介君厚南	盛谷龜千代君厚東	田中政之進君	
在東京	田中伊勢介君全	田邊晋太郎君全	柴田隼太郎君全	田中助七郎君	
全	笠井久太郎君全	眞鍋喜代藏君全	湯田精藏君全	藤井甚五郎君	
全	明石君藏君全	眞鍋代三郎君全	繩田祐右工門君	在廣白石文右工門君	

厚東	坂田梅之進君	厚南	河野嘉右工門君	厚東	藤井元三郎君	全	西村千代藏君
厚南	岡田傳之助君	厚東	西村菊右工門君	全	藤井喜平治君	高千帆	野村善之助君
全	目義太郎君	全	藤井忠徳郎君	全	藤井庄作君	全	西野九郎左工門君
全	青年養徳會	全	藤井益千代君	全	藤井今助君	全	藤本受三郎君
厚東	尾山梅之進君	全	石川甚太郎君	全	藤井種千代君	大坂	貞永省三君
全	藤井茂平治君	全	根木清之進君	厚南	雜賀徳一君	全	杉野晋七君
全	岡田長之進君	全	藤井善左工門君	全	徳永與一郎君	吉敷郡	増野房人君
松木	白松熊太郎君	在馬關	加藤熊太郎君	亦問關	本田仙藏君	二俣瀬	厚東智照君

特別賛成員芳名

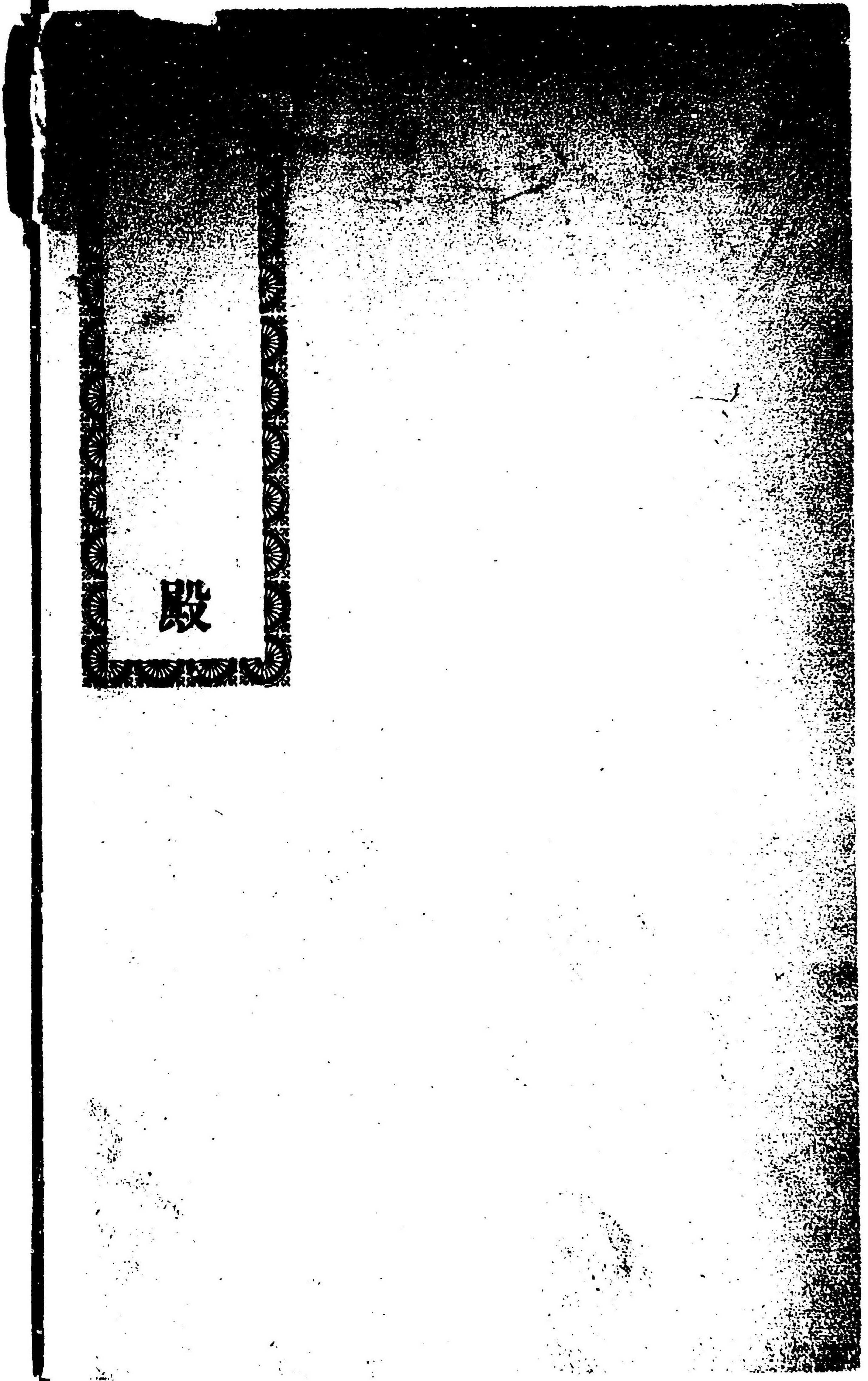
佐波郡香川 無讀君 吉敷郡佐波 成章君 吉敷郡真城 厚津君 全 工藤 裕行君
 全 神保 達元君 赤間關多田 進賢君 全 佐々木 通真君 全 旭 真乘君

厚東	坂田梅之進君	厚南	河野嘉右工門君	厚東	藤井元三郎君	全	西村千代藏君
厚南	岡田傳之助君	厚東	西村菊右工門君	全	藤井喜平治君	高千帆	野村善之助君
全	目義太郎君	全	藤井忠二郎君	全	藤井庄作君	全	西野九郎左工門君
全	青年養德會	全	藤井益千代君	全	藤井今助君	全	藤本安三郎君
厚東	尾山梅之進君	全	石川甚太郎君	全	藤井種千代君	大坂	貞永省三君
全	藤井茂平治君	全	根木清之進君	厚南	雜賀德一君	全	杉野晋七君
全	岡田長之進君	全	藤井善左工門君	全	德永與一郎君	吉敷郡	增野房人君
船木	白松熊太郎君	在馬關	加藤熊太郎君	亦問關	本田仙藏君	二俣瀨	厚東智照君

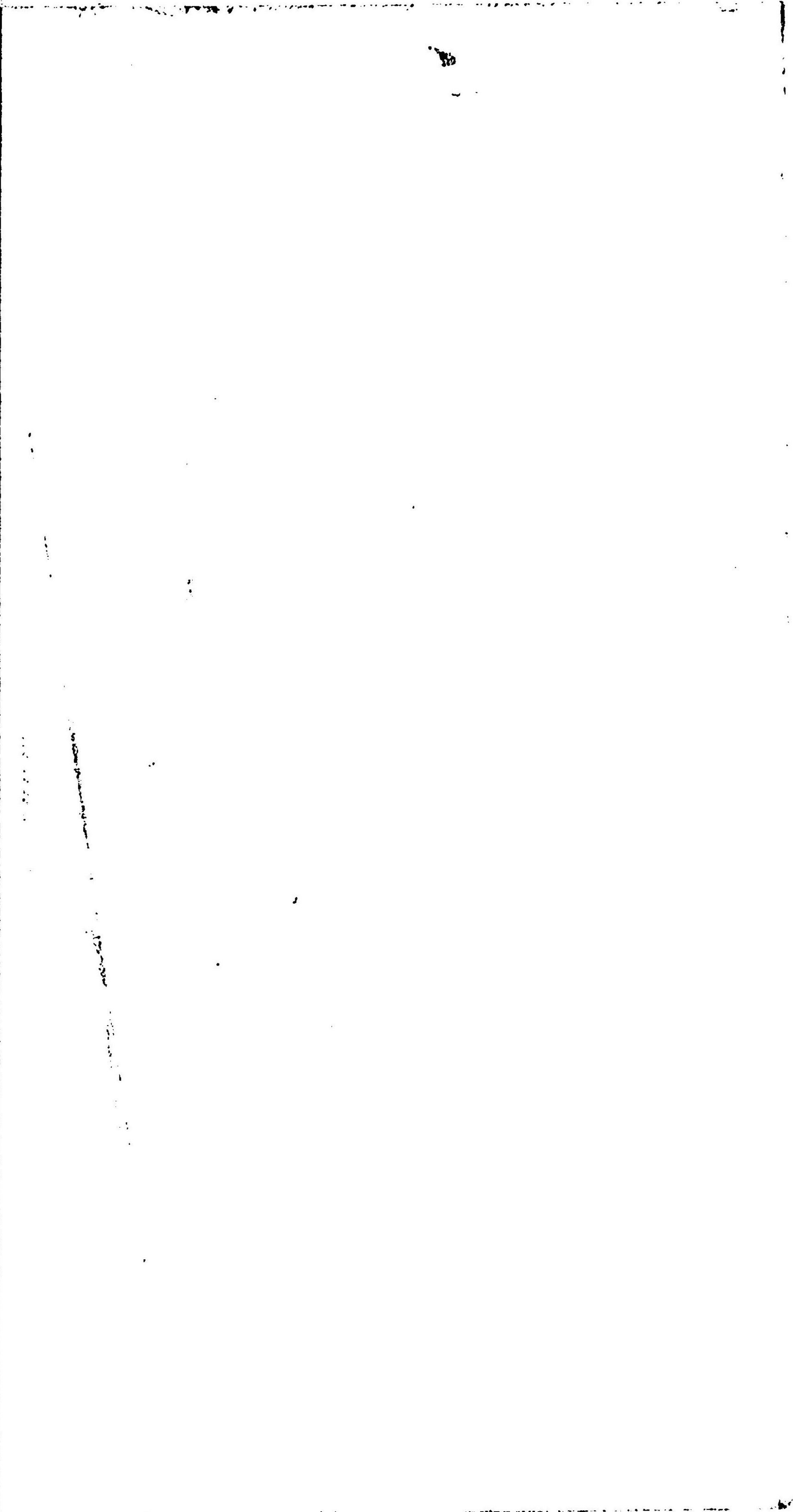
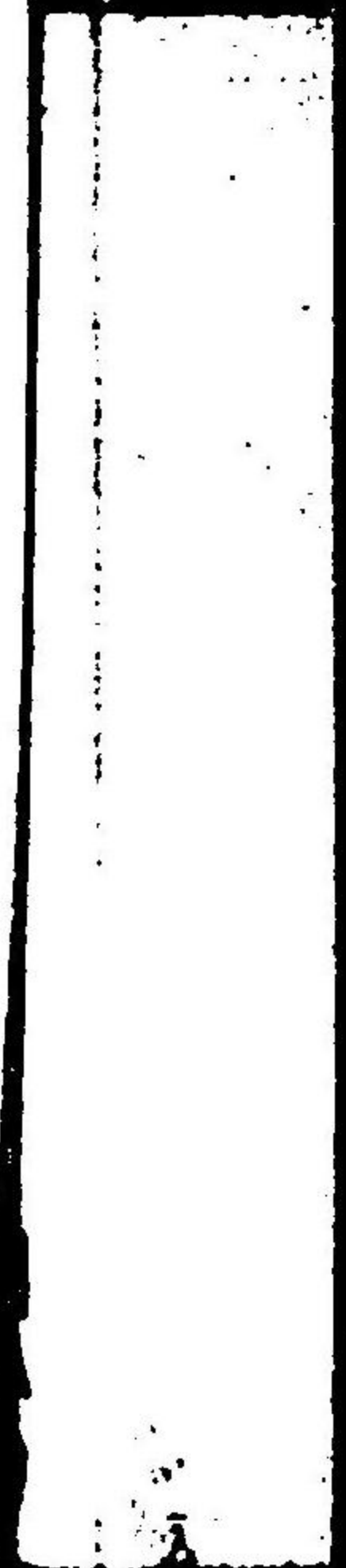
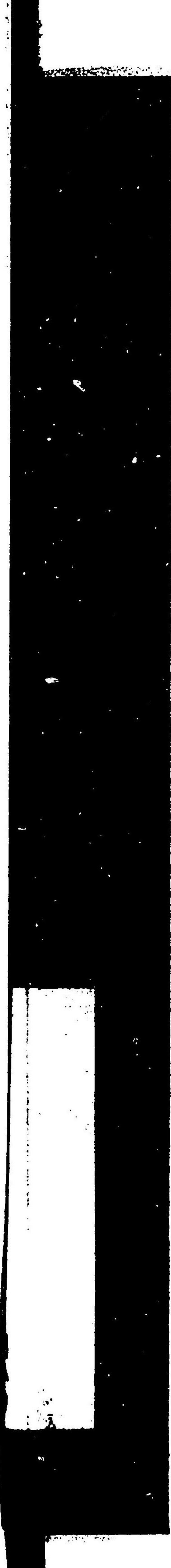
特別賛成員芳名

佐波郡	香川 暎藏君	吉敷郡	佐波 成章君	吉敷郡	真城 厚津君	全	工藤 誓行君
全	神保 達元君	亦問關	多田 道豐君	全	佐々木 通真君	全	旭 真柴君

吉敷郡	小池 普達君	大嶋郡	大洲 鉄也君	全	赤野 鴻謙君	小倉	長岡 讓君
大坂	河村 伊七君	吉田	曾我 道宣君	佐波郡	兒玉 圓乘君	豐浦郡	小泉 塵芥君
在大坂	吉見 頼母君	熊毛郡	東堂 謙致君	豐浦郡	西 靈常君	在隱岐	小林 皆真君
藤山	櫻井 勝次郎君						



殿



特49

540

教育論

井上 円了

国立国会図書館

050314-000-6

特49-540

教育論

井上 円了/述

M25

BEA-0526

